(社)東洋音楽学会関西支部　支部だより　第６号（1990-04-01）
Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のご案内

（社）東洋音楽学会関西支部　第１４８回定例研究会

とき　1990年４月14日（土）14:00～16:30　ところ　京都教育大学
２号館３階Ｄ２講義室
京都市伏見区深草藤森町１
☎ 075-641-9281
交　通　京阪電鉄「墨染」駅下車
徒歩約10分

担当　小林幸男（会場）大東純子（ビデオ記録）
牧野英三（司会）瀬山徹（企画調整）

14:00-15:00［報告］
リラをめぐって － イスラエルとエジプトの旅から　水野信男

15:30-16:30［連続講座《楽譜の諸相》　その８］
声明の記譜法について　岩田宗一

（社）東洋音楽学会関西支部　第１４９回定例研究会

とき　1990年６月２日（土）14:00～16:30　ところ　関西学院張記念館（４面に地図）
西宮市甲東園1-11-12
☎ 0798-53-9878
交　通　阪急電鉄今津線「甲東園」駅下車
徒歩約８分

担当　畑　道也（会場）長方正博（ビデオ記録）
二見淑子（司会）瀬山徹（企画調整）

14:00-15:00［連続講座《楽譜の諸相》　その９］
＜鹿の遠音＞の総合研究 － 古譜の比較とその解釈　幸野智子　志村哲

15:30-16:30［連続講座《楽譜の諸相》　その10］
声明における呂律の問題　澤田篤子

今後の定例研究会 開催予定 および 発表の公募

第150回　1990-09-08　岡山市内　発表申込締切 1990-07-10
第151回　1990-12-01　［予定］相愛大学　発表申込締切 1990-07-10

これ以降の予定については９月選出の新役員からお知らせします。

上記の公募は、新しいテーマによる連続講座でもフリーのテーマでも結構です。ただし、申込多数の場合など、必ずしもご希望に添えないこともあります。予めご了承ください。

◆申込方法　連続講座・フリーの区別、発表の種別（研究発表、調査報告、資料紹介、研究演奏等の別）、発表題目、使用希望機器、希望日、氏名、連絡先をはがきに明記のうえ、下記宛ご送付ください。

◆送り先　〒560　豊中市待兼山町1-1　大阪大学文学部音楽学研究室　山口修

(21) 南九州の六調子

松原武実

南九州一円に六調子と呼ばれる民謡がある。奄美の六調子は、これが伝えられて変化したものと言われている。「民謡源流考」もそのように述べて、それが定説化している。ハンヤ節（ハイヤ節）は奄美六調が逆に九州にもたらされてできたもの、という説も「民謡源流考」によって主張され、これも定説化している。結論から言うと、私はハンヤ節系の歌と踊は奄美から伝えられたものでなく、もともと九州にあったものだろうと思っている。このことを確認するために六調のルーツをたどる作業を試みている。

南九州の六調は２通りある。ひとつは、鹿児島市周辺や大隅地方では今でも祝歌として歌われている。三味線伴奏の静かな歌である。祝の座で必ず一番目か二番目に歌われる。「順の歌」としたがって呼ばれている。

もうひとつは騒歌で、これは球磨地方によく残っている。威勢のいいパンチのきいた歌で、中に口説調のハヤシ詞がはいる。三味線と太鼓のにぎやかな伴奏がつく。『日本民謡集』（岩波）がこれを祝儀歌としているのはまちがいで、明らかな騒歌・酒盛歌である。現在はこの騒歌としての六調子は、球磨以外ではほとんど歌われなくなっているが、郷土誌その他では確認することができる。奄美にもたらされた六調子はこちらの方で、音楽の熱狂性は奄美で獲得されたものではなく、騒歌六調子にもともとあったものである。

さてこの六調子のルーツを『日本民謡大観』はヨイヤナだとしている。瀬戸内海から大分にはいったヨイヤナが東海岸をションガ節として南下し内陸部を六調子として南下したというのであるが、どこまでそれが実証できるであろうか。とくにションガ節との関係は問題で、私はションガ節は別系統の歌だろうと思っている。

町田佳聲
1967 「民謡源流考」『日本の民謡と民俗芸能』東洋音楽学会（編）［東洋音楽選書１］ 東京：音楽之友社．45-185.

(22) 幻の琴曲『幽蘭』

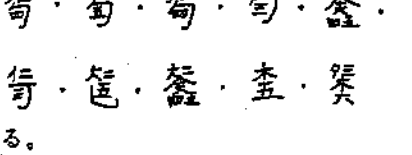
志村哲男

仰汎三中指打徴、覆汎二中指打羽、仰汎三中指打徴、打角、覆汎二全扶徴羽、食指汎一無名打角、覆汎二挑羽、節全扶徴羽、食指打羽、仰汎三食指打文應、一句。

特定の記譜法を知らないものがある程度普遍的に楽器を記録するには、楽器の何処を如何にして音を出すかを、具体的に詳しく文字を使用して文章で書き表わすほかになかろう。

前記の文章譜は、中国六調時代（六世紀中葉）の最古の琴（七絃琴）譜で、碣石調幽蘭の曲の第二段第四句である。唐代の写本が日本に伝来し、現在、京都西賀茂の神光院に所蔵され、国宝に指定されている。この曲は、中国では楽譜が伝わらず曲名のみが残り、幻の琴曲とされていたが、江戸時代に日本から写本を逆輸入し、古逸叢書にも納められ、重要な琴曲となっている。

文章で書かれた琴譜も、隋・唐代をへて宋代に入ると記譜法も完成され、弦名・徴位・指使い・弾法などを表わす漢字の部首を寄せ合せた減字譜が定着し今日に至っている。因みに上述の長い文章譜を減字譜で表記すると、



となる。

初歩的で繁雑な楽譜である文章譜は、記譜法の改良・発達により簡略化され記号化し、ひとつの符牒となっていく。五線譜をはじめ日本の各伝統音楽の譜、中国や朝鮮半島その他各民族の音楽の譜及び古楽譜も全て各々の符牒なのである。

(23)「フホウ」と「ロツレ」

瀬山　徹

尺八の譜は大きく分けて「フホウ」の系列と「ロツレ」の系列に分かれています。つまり、尺八の指使いと対応するカタカナの用い方に、二つの種類があるのです。歴史的には「フホウ」の系列が古く、有名な『糸竹初心集』（寛文４年・1664）の一節切の譜もこれを用いています。「ロツレ」が主流となって来るのは普化尺八からで、京都の明暗寺が「フホウ」を踏襲していたのに対して、江戸の一月寺、鈴法寺は「ロツレ」を用いました。今日では、現行の琴古流、都山流などが「ロツレ」を採用している一方で、竹保流では「フホウ」を幹音に「ロツレ」を派生音にあてるという、独自の記譜法をあみだしたりしています。

では、この「フホウ」や「ロツレ」のよって来るところは、と問われると残念ながらあまり定かではないのです。「ロレツがまわらぬ」などという表現と関係ありとする説なども、あながち笑い話だけではないかも知れません。

ただ忘れてならないことは、これらの譜字が、ただ単に音の高さを表しているのではなく、指使いすなわち身体の動きと、さらには音楽そのものと密接に関連しているという点です。従来の研究で、ともすれば見落とされがちだったこの視点についてはライリ・リーが論じています。

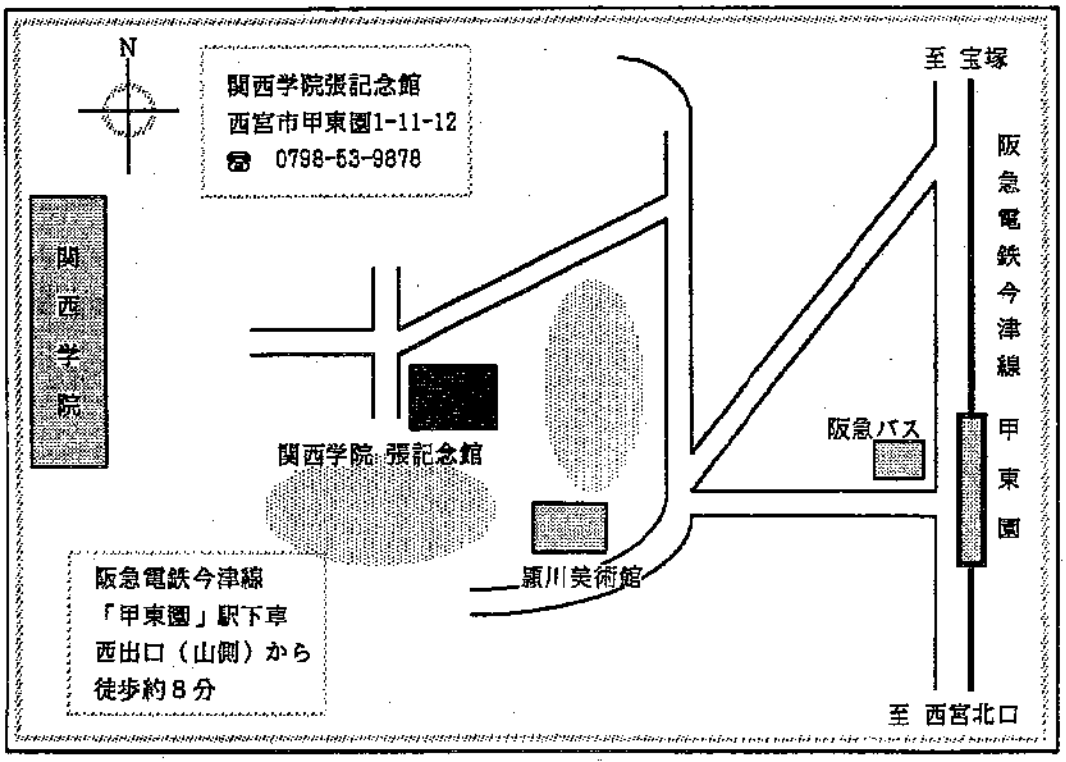
LEE, Riley Kelly
1988 "Fu ho u vs. do re mi: the technology of notation systems and implication of change in the shakuhachi tradition of Japan". Asian Music, 19(2):71-81.

連続エッセーも好評のうちに回を重ねてこの号で24篇を掲載するまでになりました。投稿いただいた皆様にお礼申し上げます。これからも、ますます多くの会員から原稿が寄せられることを期待しています。

前号までのタイトルをここで再録しておきました。これからの執筆にご参考になればと思います。投稿お待ちしています。

（０）「音楽を記すこと」と「音楽について語ること」　山口修
（１）ナヤシ　瀬山徹
（２）三味線の「手」　大塚拜子
（３）帖（じょう）　南谷美保
（４）イロモ（irama）　高岡結貴
（５）コロン（koron）とソリ（sori）　廣井菓子
（６）メリとカリ　月溪恒子
（７）「オカズ」　由比邦子
（８）音をとらえることば　卜田隆嗣
（９）ギリシア民謡の記譜　大東純子
（10）「音遣い（オンヅカ）」　山田智恵子
（11）Prescriptive と descriptive 三味線の場合　大塚拜子
（12）「ひく」「する」「かなづ」　久保田敏子
（13）ちょいぎり　峯雅彦
（14）「手」一節切の場合　野本まり子
（15）ビウエラのタブラチュアの謎　アルバレス・ホセ
（16）音の記号化　藤井知昭
（17）「関節」と「曲の中の節目」　田井竜一
（18）● 百と拍子　橋本曜子
（19）「全絃神速反覆」・「アルペッジョ」　仲万美子
（20）「カイロノミー」　永原恵三

第149回定例研究会　会場案内



編集室から　『支部だより』第６号をお届けします。お忙しいなか原稿をお寄せくださった皆様、大変ありがとうがざいました。また、連絡・通信などでご迷惑をおかけした方々も御協力ありがとうございました。瀬田徹

今後の発行予定・原稿の締切は次の通りです。

第７号	1990年８月下旬 （９月・11月定例研究会案内）
原稿締切	７月10日

支部関係の問い合わせ先

総務関係	月渓恒子・幸野智子	火・水・金
〒585　大阪府南河内郡河南町東山　大阪芸術大学音楽学研究室	☎0721-93-3781内線539	
機関誌関係	藤井知昭	水・木
〒565　吹田市千里万博公園10-1　国立民族学博物館	☎06-876-2151	
例会・支部だより関係	山口修	月・木・金
〒560　豊中市待兼山町1-1　大阪大学文学部音楽学研究室	☎06-844-1151内線3251	

入会等のお問い合わせ

（社）東洋音楽学会関西支部　☎06-612-5900 内線331
〒559　大阪市住之江区南港中4-4-1　相愛大学音楽学合同研究室内